

前回に続いて、郷土に遺る新体詩の中から、大著『太宰春臺』の著者として知られた前澤淵月（一八八三～一九四九）の詩を紹介する。

淵月は本名政雄、泥仏・岳鳥とも号した。

長野師範学校を終えて、下伊那郡伍和小学校（現阿智第二小）へ赴任し、大正十三年泰阜小学校長を最後に退職するまで二十一年間小学校教育に従事した。以後、中等学校教員に転じ、下伊那農業学校に勤務し、教職通算四十四年に及んだ。この間、前述の大著を出したほか、『赤石

嶽より』『一茶の面影』

等、多くの著書を世に問うた。また、近藤赤嶺・岩崎雨村・長谷川喬村らと「潮歌会」を興して短歌や俳句を作るとともに、『伊那史料叢書』発行にも尽力

声に出して読みたい郷土の近代文学（五）

鎌倉貞男

は
今ここに別れゆくとも
佛は胸に宿らむ。

みむなみの空の床し
き。

返し歌

三日みぬ桜ながらの思
ひして
彼方しぬばゆ南の空

は、吾人の最も満足と
するところなり。此詩

：真情を流露して：人情
軽薄の世に師弟の温
情を有するは是洵に異

見返れば先の弥生に
おもにはの桜愛でしが
いつまでの契りなりけ
む

偽りの露も宿さで
眉若く匂りほのかに
清かりし子等よ教へ子
幸あれな世はとことは
に。

この詩は、四行七連
から成る七五調文語定
型詩である。若き日の
淵月が、南山学校（旧
泰阜南山小）を離れ、教

数は、此種の文学の広
く読者に歓迎せられん
ことを切望す。」とあ
る。

またたきの夢のまにま
に。

かくばかりなどて心に
ねびろくも幡りつる

泰阜南山小）を離れ、教
え子に別れる思いが詠
われている。「返し歌」
と題して短歌一首を添
えているところからす
ると、本人は『万
葉集』以来の「長
歌」を意識してい
たかもしれない。

時代は変わったが、
今もこうした純粋な師
弟愛があると信じた
い。

した。昭和二十四年、
六十七歳で没した。

次は、その淵月の
「泰阜南山校を去るの
歌」と題する詩である。

泰阜南山校を去るの歌
帰りなむさらば教へ子
かくあるも尽きじ名残

さなりけり、さらばゆ
かまし
なつかしや、暖けき褥しとね

朝夕を我に煩ふ
老いになる父母かぞへ在す

されどこは人の定めか
美しき山も流れも
しばらくは雲に隠れん

あいらしその佛は
なかなかには仇なり
帰りなむさらば教へ子
かくあるも尽きじ名残
は

今ここに別れゆくとも
佛は何処いなめや。

実は、前回紹介し
た松村蓬麻がこの
詩を絶賛している。
新体詩に長けてい
た蓬麻の評文には、
「作者、教育に従事
しつつ此の作ある



淵月の未定稿、他